『武道伝来記』論　その五

佐々木昭夫

十五

巻三の第四十五「初茸狩は恋草の種」の叙述は、本作品の他の多くの篇と共通して悠然と開始される。

作州津山の古き城下に沼菅藏人子息半之丞美少ならびなく。

冒頭まず主人公なり主要人物なりの紹介から始めるのは三十二話のうちいくらもあるが、この冒頭部はいささか平凡である。例えば巻五の第二に比べて見ればそう言える。「古き城下」この「古き」は他の諸篇の冒頭部に多い「むかし」や「昔日」同様、これから語られる物語が過去に生起したことを示すが、同時に「古き」と「美少」が軽く対比され、しっとりと落着いた城下町に存在する美少年を印象づける。

半之丞の美少年ぶりを説く「春は限りみちがき櫻を欺き秋は月の満るを闕ると見たへ悩まぬはなし」は一読はなはだ類型的な凡句だが、何か或るわざとらしさがあり、それが貞享ごろの美貌自慢の若衆を描くのにふさわしい。「桜を欺き」とか「月の満るを闕ると見」などの誇張法、桜の花の盛りの短いのをこよなき長所のように言う態度など、これは美女の描き方とは違う。またこのあたり「みぢかき」とあるべき所を「みちがき」とし、「見たて」あるいは「見るさへ」を「見たへ」とする。一見誤刻だが、この美少年のかぶき者的性格を表現しようとして意図されたものか、あるいは他に何か一話全体にかかわる意味があるのか。後にもう一度考える。このようないかにもくせの強い言葉で半之丞の美貌を説明したあと、三行ほど場所と人々の説明があってから、半之丞はいわば思わせぶりたっぷりに登場する。

此所は海遠く久米の皿山と聞えし麓に初茸籾生て。草分衣露にそぼち。諸士是に狩して勤の暇を慰み折からのつれ〳〵をもなだめぬ。半之丞もけふは

「海遠く」はその場所に落着いた静かさの性格を与える。波のとどろく音が遠く聞こえてくるか否かには関係ない。もっとも海からの長い距離は瞬間的に感得される。だから「海遠く久米の皿山と聞えし麓」は、「海」「山」そして「麓」と巨視的また鳥瞰的に地形の映像を読者に感じさせる。そして直後に「初茸籾生て」と、それとは対照的に小さなもの半ば隠されたものに読者の注意を強く引き付け、「草分衣露にそぼち」と人の出現を予告しながらも、詩的性格を保ち、すがすがしい初秋の朝の気分を表現する。

久米の皿山が歌枕ということも詩的感覚のために効果的であり、「初茸」の「初」の字もある新鮮さを生んでいる。「諸士是に狩して・・・」と記述が人事に移り、複数の侍が出てきて世俗的雰囲気が漂うが、茸狩をするわけでもない半之丞はそれとは違うと言う。

半之丞もけふは霧の絶間かちに尾花吹あらし静なるに若黛纔めしつれ潜然に立出編笠を被き姿自慢の色香をふくみ嶺の紅葉一枝手折せ

これは一挙手一投足すべて人に見られることを意識している動作であり、それを完璧に行っているとの自信に満ちている。一語一語見てゆく。「霧の絶間かちに」この「霧」の語は少し前の「露」と呼応し、このくだり全体に文字通りのみずみずしさを与えている。霧が今朝は晴れがちであることを言い、次の「尾花吹あらし静なるに」と共に天候の説明だが、「半之丞もけふは」の語が前にあり、「若黛纔めしつれ」と後も半之丞の動作だから、半之丞が外出するに至った事情を示している。ところで「尾花吹あらし静なるに」の「あらし」の語が読者の注意を引く。冒頭から静かな初秋の朝をひたすら印象づけてきたこの文中で特に目立つ。「あらし静なるに」と嵐の存在はすぐに否定されるが、季節は秋だから間もなく激しい嵐に襲われる可能性もあるのだと読者に思わせることは確かである。本篇は劇的な事件が不意に起こる、それをかすかに予徴している。もし霧が立ちこめていたり嵐だったりしたら半之丞は外出できないのか、もち論そんなことはない。もともと他人の目は大切だから、今日は天気が良いから茸狩に出ている侍たちも多かろうと期待したり、霧が立ちこめているよりも自分の姿が人にはっきり見えるだろうと計算したり、というようなこともあったのだろうが、それよりもやはりこの天候とこの風景を美貌のおのれの背景としていかにもふさわしいと判断したから外出したのだ。それは「若黛纔めしつれ潜然に立出」の動作、特に「纔」や「潜然に」の形容語があからさまに示している。この両語は語り手が半之丞の姿を見て形容しているというより、半之丞の方が自分の動作を「纔」「潜然に」と充分な満足感を持ちながら意識していたことを示す。

編笠を被き姿自慢の色香をふくみ

半ば顔を隠すことによって美貌の効果を高めるという動作は、今日では女性にあってもわざとらしさ、不自然さゆえあまりほめられた事ではないが、この時代のかぶき者の流れをくむ流行の先端をゆく若者には、そのわざとらしさ不自然さが、価値あるものとされたのだろう。「嶺の紅葉一枝手折せ」も、いかにも美貌の若衆にぴったりの動作ではあるが、自然な行為と見てはならない。半之丞の動作行動は現実に今他人の視線がおのれに集中しているか否かにかかわらず、かくあるべきと自ら思う通りの動作なのだ。いわば人目の全く無い所でも他人の眼を強く意識している。こうした半之丞のあり方は次に登場する竹倉伴蔵と対照的に大きく異なっている。

同家中大道孫之進にかくまはれて國の守を望し竹倉伴蔵これも茸狩に片山團右衛門といふ男にさそはれて出しが荒前より半之丞をみて恋沈み跡をしたひて同じ庵にたよりながら卒尓に詞をかくべき便もなく仁丁所に。

伴蔵の登場もおだやかである。この作品のこれまでの雰囲気をこわすような働きは何もない。半之丞の登場の記述と対照的に、平凡な一人の浪人にふさわしく淡々たる説明である。「半之丞をみて恋沈み」の語が読む者の注意をひく。他の用例如何は措くとして少くともこの場合、この語は、伴蔵の半之丞への片思いは成就の見込みなど始めから無く、伴蔵はおのれが一介の浪人に過ぎぬことを充分認識していたことを示す。伴蔵の恋は絶望と共に生まれた。ただあとを慕ってついていくだけである。「卒尓に詞をかくべき便もなく行方所に」一挙手一投足が美の規範にかなっていなければ自分で承知できないわざとらしさに満ちている半之丞に比べて、伴蔵の動作はいかにも不器用素朴でまた自然である。それがもうこの辺で充分表現されている。

テキストではこの人物のことを「伴蔵も兼て此道を好るやさ男にて」という。少しあとでは「水野何がしの流れを汲の武道みがきなりしが」とあり、この二句が直接に伴蔵を定義している語である。これは作品を読んだ読者の感じ取るものとは違う。「やさ男」「武道みがき」は一人物に両立しないこともないが、その場合には文武両道に通じた幅の広い人格を示すことになる。テキストが明言する以上否定のしようもないが、これは単なる能力などでなく人柄や性格はどうだったのだろうと、一段内側の人物像を読者は求めざるを得ない。そのために、この男の別に矛盾してはいないが、一人の人物の二面ということになると興味を引かれざるを得ない二語がある。ここまでわかったこの男のそれより深い本性は、素朴さというものだった。半之丞が庵の僧と「楓林の月」を題に漢詩のやり取りを始めると、そこへ割り込んでいく。「加様の推量は高き賤しき隔ぬならひ疎忽ながらと即座の對句に敉の思ひをこめて綴れば」と。「高き賤しき隔ぬならひ」は浪人の身であるおのれへの伴蔵の自覚がうかがわれるが、この姿に厚かましさを感じるのは必ずしも感じ過ぎではない。なぜならそれに対する半之丞の反応「扨〻かたじけなき御心ざしどなたは存ぜずと頂き給ふ」に対して伴蔵は「頂き給ふを調子に竹椽にねぢあがりて」という態度であったと記されるからである。庵の僧と漢詩を唱和するという半之丞の行動は、先に述べた美貌の若衆の、あらゆる動作発言を美の規範で律しているわざとらしさを持っている。その延長上に見知らぬ男が唱和にわり込んできたとき、邪魔者扱いになどせず、このように礼儀正しく受け取るという行為があるのだろう。それをいいことにして竹椽にねじ上げるとはいささか厚かましい。「頂き給ふを調子に竹椽にねぢあがりて」の語調にはこの行為を否とする語り手の気分が現れている。

同じことは翌日の伴蔵についても書かれ「伴蔵付あがりして」と憎々しげな感覚は強められている。そこまでのくだりを引用する。

頂き給ふを調子に竹椽にねぢあがりて名乗あひけれ共。あらはにしては心の浅み酌るゝもはづしくよい程に挨拶して帰り。其翌日たまり兼て半之丞方へ見舞折をうかゞひ心底をかたれば。思し召千万忝し。さりながら我らごとき者にさへかまひ申者あると申せば事おかしく。され共それ程の御深切あまり過分に存ずる上せめてはと玉の巵の底意なく見えしを伴蔵付あがりして御念比の御方はどなたと問ば。

伴蔵の厚かましさと不器用さが全般に感じられるが、「あらはにしては心の浅み酌るゝもはづしく」と妙な羞恥心も持っている。

翌日半之丞宅へ訪ねて心底を語ったというのはどういうわけ

か。この時代美貌の若衆に念者がいないはずはないではないか。昨日何句かの対句を半之丞が「かたじけなき御心ざし」などと謝意を示して受け取ってくれたのを最大限自分に有利に解釈したのだろう。勝手な解釈、勝手な見込みの当てが外れて何か腑に落ちない感じがしたのだ。一句まことに巧みに伴蔵の心的状況を示す。「事おかしく」は、深い落胆や絶望はもっと後、半之丞が目の前にいなくなってからの事だという事実を教えてくれる。とくに「され共それ程の御深切あまり過分に存ずる上せめては」と酒盃を出してもてなす態度に出られた場合、衝撃的な落胆に襲われるというような事はない。だから伴蔵は落胆どころか「付あがりして」念友はどなたかなど尋ねたりする。半之丞の答えは、

是はいな事御尋ねに預り近比迷惑いたす。私是程の心ざしに其御詞は御自分様には似合ませぬ。いか程仰られても此段は申さず

と当然の反応と思える。これは言葉全体として親しくもない客人に対する礼儀を充分に保っている。「御尋ねに預り」「御詞」「御自分様」「仰られても」。同時に相手の非は強い口調で指摘する。「いな事」「近比迷惑いたす」「此段は申さず」。さらに、せっかくだから酒盃を与えているではないか、その俺の気持ちがわからぬのかの心中を「私是程の心ざしに」で明示する。若衆の取るべき行動発言の規範を一歩も踏み外すことのない発言であり、礼儀を崩すことなく相手に真実をたたきつける、胸のすくような言葉である。

この半之丞の言葉を聞いて伴蔵の胸には直ちに失望、そして絶望が萌した。伴蔵は盃を頂載したくらいで有頂夫になるべきではなかった。「念者をいたはるの心ざし面にあらはれてつよく云切に力なく」、つまり半之丞と念者が心が結ばれている事実をあからさまに見せ付けられてしまう。「御念比の御方はどなた」と問うた時の伴蔵のつもりでは、半之丞の念者なぞ今相対して語っている半之丞と自分にとって遠くにいる第三者だったのだが、それを聞いた半之丞の言葉と表情は突如半之丞と念者が一体であり、伴蔵など何の関係もないことをいやという程思い知らす。伴蔵の単なる関心でさえ無残にはね返されてしまう。「念者をいたはるの心ざし面にあらはれて」は伴蔵の目に映じた半之丞の表情である。

・・・力なく承りかゝるからは承らねばおかず。又存じたる者に聞ませんと帰り。なんなく聞出しける。

ここでの伴蔵の言葉、直前の半之丞の礼儀を保ちながらも厳しかった言葉と同様、完全ないわゆる直接話法などではなく、言ったことの調子や心理的な意味合いをも逃さず、そうした意味をむしろ強めて要約した言葉だが、力なくぶつぶつ呟いた語調を適確にとらえている。半之丞への言葉としてはちょっと無礼ではないかとも思われるが、「承りかゝるからは」など、もはや親しく半之丞に語りかける言葉ではない。ほとんど独り言である。ショックと落胆と不満はそのまま表現されている。くど〳〵心理を説明するよりも、単なる暗示された語調で、多くの事を一瞬にして伝えるという手法である。相手の厳しい態度に対して思わず漏らした不満と感じられ、「存じたる者に聞ませんと帰り。なんなく聞出しける」は、意地を張って半之丞の念者が誰であるかを探ったわけだ。

ここで伴蔵なる人物についてまとめてみる。この男は一言で言ってごく自然な人物である。「半之丞をみて恋沈み」からそれは感じられる。自分の思う通りに行動し発言する。もち論ある程度の自然な恥らいの感覚も持つ。「あらはにしては心の浅み酌るゝもはづしく」しかしこれはかえってこの男の「竹椽にねぢあが」った行動を際立たせる。自他に対して正直そのものであるが、語り手はそれを決して好意的に語ってはいない。やはりどうしても適切な遠慮に欠けることが多い。半之丞が知り合いの僧と連詩を吟唱するのに強引にわり込み、相手がこちらの唱句を受け入れると、それをきっかけとして「竹椽にねぢあがり」と、やはりなんとも厚かましさは否定できない。

またこうした伴蔵の人間像は沼菅半之丞と対照をなしている。半之丞は行動や言葉のすべてが自ら意識され、美事に規範にかなったものであり、多くの場合わざとらしささえ否定できないほどである。伴蔵は正反対だった。両者の食い違いははっきりしている。最も重要なのは半之丞が美貌の若衆らしく、相手の厚かましい要求や行動を、如何にも好意を持っているかに受取るという態度に出た場合、伴蔵はそれを本気に、最大限自分に有利に解釈してしまう点だろう。

扨〻かたじけなき御心ざしどなたは存ぜずと頂き給ふ

されそれ程の御深切あまり過分に存ずる上せめてはと玉の巵の底意なく見えし

これらの半之丞の行動は、美貌の若衆の取るべき態度としてまことにふさわしく、時宜にかなっていたが、伴蔵はそれを理解できず、相手の好意の表れと都合良く解釈してつけ上る。半之丞はこのような男にはもっとも冷淡にすべきだった。生国、加州の人とするのは決して野暮な田舎侍というわけではないが、このような勝手な男はどこにでもいる。そこを示そうとしているのか。

このような人物に伴蔵を設定した理由、それは能登屋藤内を伴蔵が叱りつけ圧伏してしまうという驚くべき事件を作品に実現させるためである。これは恐らく普通には考えることもできない不思議な事件だった。「町六方のかくれな」い「男達」の藤内が一介の浪人である伴蔵に叱りつけられて震え上がり、泣きながら命乞いしたというのだから。なぜそんな事が可能だったのか。西鶴はこの作品でそれが現実にあり得るものとして描きだした。それは何よりも伴蔵・藤内両者の心理が辿る一分の隙も無い必然の道筋の結果としてである。

伴蔵の人柄が如何なるものか、以上のように読者は充分納得している。こういう人物でなかったら、一人でのこのこ出かけて行って藤内を高飛車に怒鳴りつけるような行為に出ることなど無かったろう。もちろん「武道みがき」としての自信は、まず基本的条件として必要だろうが、それよりも普通人の常識とは別の次元で行動する自然児という性格が重要だった。それにしても伴蔵は怖くなかったのか。この場合伴蔵には激しい怒りがある。恐怖心を消し去るほどの怒りは彼を半ば盲目にしていたのだろう。ところで、すごすごと半之丞宅を辞した後の伴蔵がいかに怒りを募らせていったかはひと言も書かれていない。読者はテクストからそう想像させられるだけだ。

なんなく聞出しける。其男は本町二町目能登屋藤内とて名を得し町六方のかくれなく。心達の結構なる御侍は是が籏下

に御機嫌取程の器量勿論身袋よろしきにはかまはず。心底のいさぎよき男町人にはしほらしきと思ふ折から御姿を見初一命を御返事なき先に参らせたるよりかはゆがらせられ此三年の念比ぞかし。

この藤内についての記述は伴蔵が聞出し得た事実ではあるが、伴蔵に伝えられた形でではなく、つまり伴蔵に語った町の人達の言葉の要約などではなく、この機会を利用して語り手が読者に向けて説明し直している形である。それにしてもここに記された藤内の姿は堂々たる威容を誇っている。本町二町目と住む町名を言うのは町奴だからだろうが、それさえ何か重要な肩書でもあるかのように聞こえる。「心底のいさぎよき男」などは讃美の気分に溢れる。伴蔵に語った町の人の話の調子とも取れる。この語はそのまま「町人にはしほらしきと思ふ折から」と半之丞の心理へと移り、もはや伴蔵は聞き手としても姿を消す。「御姿を見初一命を御返事なき先に参らせたるよりかはゆがらせられ此三年の念比ぞかし」若衆半之丞の方で押しかけていって弟分となったことを告げるこのくだりは衆道の甘ささえ匂わせる。しかも三年間続いているというから、昨日始まった伴蔵の片思いなぞ何の意味もない。伴蔵が耳にしたこれらの事柄は彼をたたきのめしたに違いない。彼は諦めなかったのか。諦めて半之丞・藤内の前からそのまま消えてしまわなかったのは何故か。それは彼が藤内に面会に行き、頭ごなしに叱りつける言葉のうちに明瞭に示される。「なんなく聞出しける」以下の数行は伴蔵にとっていかにも手ひどい打撃だったが、にも拘らず彼が藤内に逢いに行ったなら、それはそれだけ激しい形を取る筈である。伴蔵は鬱憤を爆発させるだろう。その事を読者は知っている。意外ではない。期待通りだったが、それは期待をはるかに上まわる激しさである。

尋ね行て藤内を門外に呼出し頭から刀の反を返し町人には腰が高し下におれと只一のみに眼を見出しねめ付たる氣色。藤内まづぎよつとして我に是程に物いふ者なし。いか様公儀の權威もありやと三指になってうかゞひぬるに。半藏刀に手を懸ながら聞ばおのれめはかたじけなくも沼菅殿の御惣領を勿躰なくも兄弟分とする事是を摩利支丹も憎しと思しめさん。なれ共彼は形を見せ給はず我今弓矢八幡大井の神勅に任てこゝに来る殊にけふ半之丞様の御姿を拝み奉り御流をいたゞき向後よりおそらく桓武帝の末孫竹倉半藏平正澄御後見を仕る。只今八月廿八日より其方彼御門外にもからすねを運ぶ事を堅く停止す。推参千万言語道断びく共せば首と胴とのきぬ〳〵さあ只今返事は〳〵と大道に両剣を横たへ白昼の往来とゞまつて見物す

凄まじい伴蔵の見幕だが、この伴蔵と藤内の対決の模様、いや藤内に浴びせる伴蔵の言葉に藤内屈服の次第が表現されている。それは第一に伴蔵と藤内の立場の違いである。上で見たように伴蔵は怒りによって恐怖に打ち勝ち、その怒りを爆発させた。昂奮と緊張の極にあったであろう。一方藤内はそのような心の準備は何ひとつできていなかった。完全な不意打ちである。大体普段から高飛車に怒鳴りつけられる経験がまるでないというのが間違いのもとである。「まづぎよつとして我に是程に物いふ者なし。いか様公儀の権威もありや」は合理的な判断だろう。またこうした男伊達どもは「公儀の権威」にはすこぶる弱かったようだ。町奴は旗本奴とは抗争をくり返すが、幕府や奉行所、藩庁の公式命令

には唯々諾々と従ったらしい。だがこの場合公義などでない事はすぐわかる。それよりもここで重大なのは「いか様公儀の権威もありやと三指になってうかゞひぬるに。」この姿勢を取ったことがまず敗北を決定的にしたとも言える。今日でもやくざや政治家など喧嘩を商売にしている連中は誰でも知っている。はじめから覚悟の上でじっと相手の弱点をねらいながら低い姿勢を保つというのは全く別だ。ここの藤内のように「まづぎょつとして」「公儀の権威もありや」と慌てて三指の姿勢になったのは最悪なのだ。伴蔵の言葉でまず気がつくのは冒頭の「聞ばおのれめは」の一句である。藤内に関する情報、半之丞と藤内の間柄についての知識、いずれも伴蔵にとっては何とも聞きづらいものだったろうが、語り手が読者に知らせただけでなく、ほぼ同じことを伴蔵も聞いて来たのだと分かる。次に伴蔵の言葉から強く感じられるのは、彼の怒りには身分主義的偏見が大きく関与しているという事である。藤内などたかが町人ではないか、俺は侍なのだ。それなのに浪人で貧しく、一方藤内は町人の分際で派手に景気よく、侍を子分にしたり半之丞のような美少年を侍童としたりして勝手に振舞っている。言語道断の不公平ではないか。「聞ばおのれめはかたじけなくも沼菅殿の御惣領を勿躰なくも兄弟分とする事是を摩利支丹も憎しと思しめさん」、大声に、しかも「かたじけなくも」「勿躰なくも」がいささか妙な具合に重なり、せき込むような激しさで言われた語調を巧みに伝えているが、この二語は実際に伴蔵の実感だったのだろう。自己の階級的優越感を最大限度燃え上がらせている。武家の守護神、摩利支天や八幡大菩薩の名を引き、おのれを「桓武帝の末孫竹倉半蔵平正澄」と名乗る。平正澄など恐れ入るが、この時代平家の末裔を自称する者ほとんどの家系が虚構の系図であり、虚実に拘らず ― というより誰も真偽を気にする者なぞはいず ― いわゆる「歴々」の侍の大部分は皆立派な家系である。「桓武帝の末孫竹倉半蔵平正澄御後見を仕る」この伴蔵の言葉はあらん限りの力を込めて、俺は武士だぞ、お前は町人ではないかと必死に相手を圧倒しようとする意思が込められている。そして藤内は完全に圧倒されてしまったというわけである。貞享ごろの町奴の意識を探ることは難しいが、町人として厳しい身分制社会が確立し、昔のように上の階層へ登ってゆくなどもう全く考えられず、諦める以外にない。何とか日常の種々の瑣事のうちに現実をごまかして一時の錯覚を得るくらいのものだ。藤内の「心達の結構なる御侍は是が籏下に御機嫌取程の器量」という事情、また何よりも侍の子息の美少年半之丞を弟分としていることなど、藤内にとってはそういう意味がある。上の階層でも「心達の結構なる」者は、藤内的立場の人物に対して階級の差を強く感じたりすることはない。こうしたかってのかぶき者の末流たちは、むしろ社会一般の藤内的人物に対する偏見から、おのれは離脱して自由であることに大きな価値を置いていい、それが得意でさえあるのだろう。半之丞などはその典型だ。しかしそうした連中は少数で、侍のほとんどは伴蔵のように身分主義的偏見に染まっている。そしてそうした保守的侍たちと、上昇志向の藤内的町人の間にこそ階級的摩擦が最も露骨に表れる。伴蔵が藤内を怒鳴りつけたというのはそうしたドラマの一例である。それにしても、こうした階級意識なぞとは全く無関係で一種精神的自由さえ持つ半之丞的美意識と、伴蔵の偏見と憤懣に満ちた世界観、これ程互に相容れにくいものも無いだろう。ここでは前者が後者によって無遠慮に崩される様子が書かれているわけだ。伴蔵は半之丞の行動が全く理解できなかったことは前に述べた。この場合、「只今八月廿八日より其方彼御門外にもからすねを運ぶ事を堅く

停止す」と命じ、これからは俺が半之丞の「御後見を仕る」などと言っているがそれが可能だなどと考えているわけでもない。だがそれにしてもまことに勝手な言い分である。面白いのは「御流をいたゞき」とまたここでもあの盃を給わったことを半之丞が自分に好意を持ったあかしとして、最大限都合よく解釈している点である。このことは半之丞にとっては何の意味もないことは、伴蔵があのとき「付あがりして」手ひどく叱られたからよく分かっている筈なのに、このことにしがみつく以外に伴蔵には何もないのだ。自分に執心の男の衆道の申し出を断るとき、意地悪くつっけんどんに断るなど美貌の若衆の取るべき態度ではあるまい。酒を出すのがこうした場合の衆道の掟というわけでもないだろうが、半之丞の振る舞い決して間違っていず見事とさえ言えよう。ところで伴蔵が己が由緒ある侍であることをあれ程強調したのはまことに自然であり、それ以外に考えられないほどだが、これはほとんど伴蔵の意図をはるかに越えて藤内の心理的弱点を正確に撃った。藤内はいくらある種の侍たち — かぶき者的意識がまだ残っていて社会の掟や因習からある程度は自由な「心達の結構なる御侍」— を子分にしたり、半之丞と衆道関係にあったりしても、いやそれだけ一層自分が町人の身分であることを内心 — というより意識下で気にしていたろうからである。

以上のように見てくると、この喧嘩で伴蔵が藤内を圧倒し去るのは当然の成り行きだったように思われる。この事は奇蹟的と言っていいくらい珍しいものだったのだろうが、それをこのようにしっかり書き上げたのだ。人物の性格やその時の偶然的事情もすべてそれを可能にするべく準備した。

石流の藤内此勢に胸轟き雷の落かゝる心ちしてふるひ〳〵いかやう共御存分にあそはし私一命おたすけ頼奉ますると涙をうかべけるに不便まさりて半藏は宿に帰りぬ。是程に名を得し男達もさすが長袖のわりなく胸のほむらは塩釜の浦見は半之丞かの男と盃迄せし事思へば堪忍ならぬ所。世の思はく人の嘲生てかひなく直に屋敷にかけ込て

以上をまとめると、藤内屈服の理由は、まず不意を打たれたことである。伴蔵は昂奮の極にあり、自分の怒りをいやが上にも燃え立たせているというのに、藤内は心の準備などまるで出来ていなかった。次に藤内が三つ指の姿勢になったこと。姿勢が心理や人格にさえ影響するのは普通である。第三に、伴蔵に浴せられた言葉の中に、藤内の階級コンプレックスを鋭く衝く言葉が何度も繰り返されたことである。ところで伴蔵は相手の心理を深く読み計算づくでああいう態度に出たわけでは決してない。いくら自然児と言うべき伴蔵といえども、怒りをいやが上にも燃え立たせて、恐れの思いを消し去ったのだ。そしてその場合彼の怒りには身分意識が充分に現れてくるのは当然だ。それにしても藤内、もっと外の対応の仕方がなかったのか。泣いて命乞いをするなどということは男伊達の絶対に取ってはならぬ態度であり、これはまさに自分の存在自体を無にすることである。築き上げてきた男伊達の評判、それは他人の目におのれがどう映るかにかかっていたが、西鶴は無残にもその肝心な点を一語に示す。「白昼の往来とゞまって見物す」と。だが藤内がほかの態度を取ることは難しかったのかも知れない。虚を突かれることの恐ろしさである。

一方伴蔵の方は「不便まさりて半蔵は宿に帰りぬ。」とある。「不便まさりて」は心理を記すが、心理をじかに記す言葉をこの一句にとどめたため、一句が実にさまざまな事柄を豊かに語るこ

とになった。己の完全な勝利を見とどけた途端すっと緊張が解け、敗者への憐れみの念が胸に拡がる。それが実感として読者に感じとられるのだ。ためらうことなく藤内の門前へ来たのだろうが、その時彼の心理的緊張がいか程のものだったかが示される。それに伴蔵が敗れた相手に対してこれ見よがしに勝ち誇るような卑しい心性の持ち主ではないことも分かる。また、今後はこの俺が半之丞様の「御後見を仕る」と宣言したのだったが、そんな事が実現しようなどと本気で考えていたわけでもなかった事さえはっきりする。

藤内の凄惨な敗北の恨みが如何なるものだったかも明確に書かれている。この敗北は自分自身に対しても何の言い訳も効かない救いようのない敗けである。「さすが長袖のわりなく」と簡単に書くが、普段は自分自身にも他人にも隠し切っている町人根性をさらけ出してしまった。自分でも意外だったろう。男伊達として名を挙げることによって克服した筈のコンプレックスが露呈したのだ。半狂乱に陥るのも当然である。怒りは当然自分自身に向けられるべきものだ。だが人間たるものこういう場合、誰か無理やり罪を帰すべき第三者を探し出し、それに怒りをぶつける。ここでは半之丞しかいない。「かの男と盃迄せし事思へば堪忍ならぬ所」。伴蔵がおのれにはこういう事を言う資格があると主張するその根拠として辛うじて引っ張り出してきた、盃を給わった経験、それを今度はなんと藤内が事の原因を何とか半之丞に結びつけようとして、伴蔵の怒号のうちから拾い上げ、半之丞への不当な怒りの種にしようとした。伴蔵だって自分が「付あがりして」厳しく半之丞に咎められたのだから盃を給わったことに何の意味も無いことは知っている。藤内は自分を威圧する伴蔵の言葉のうちに聞き取った言葉だから、つい過大評価してしまったのか。いやそれよりもやはり何とか半之丞に怒りを爆発させるべききっかけを見つけたいので、何の意味もない盃をもらっただけのことを無理やり重大なことにしてしまっただけだろう。何故なら身分意識を衝かれた瞬間の藤内には、半之丞も武士階級の人間であり伴蔵と同類だという事実がひしひしと感じられた筈だ。その二人が盃のやり取りをする。藤内が半之丞に恨みの対象を転嫁することは、呼びさまされた身分意識によって容易だった。

半狂乱の体で沼菅の屋敷にかけ込んだ藤内の精神状態はこのようなものだった。テクストに忠実に読めばそれ以外にはあり得ない。駄言を弄したのは藤内の行為の原因を嫉妬とする見解が散見するからである。(注)

「是程に名を得し男達もさすが長袖のわりなく」は生まれは争えないもので、底に残っている町人根性ゆえに藤内は屈服してしまったのだと語り手が説明し、「胸のほむらは塩釜の浦見は半之丞」と歌語を用いながら心中怒りがむらむらとこみ上げる様を描き、その怒りは自分自身ではなくすぐさま第三者の半之丞へと向かい、「かの男と盃迄せし事思へば堪忍ならぬ所」とその怒りの一見正当な根拠を直ちに見出す。「世の思はく人の嘲生てかひなく」大勢の目の前であのような意気地ない姿をさらしたのは、恥というだけではない、男伊達の存在価値をゼロにしてしまったことだが、藤内自身には何よりも「世」「人」の目として意識され、それはもうどうしようもない。「生てかひなく」は読者も共感できる自然さを持っている。「直に屋敷にかけ込て」まで、極めて簡潔ながら藤内の心の動きにぴったり即した叙述、いやむしろ描写である。「半之丞に逢て」だけが単なる説明だが、すぐ「段〻いひもはてず」と描写に戻る。

段〻いひもはてず藤内脇指切付るをひらりとのきさりとてはそれには様子あり。先心を鎮て物を聞給へととゝむるをも聞入ず。ひた打にうつ太刀に

藤内半狂乱の姿である。あの男と盃までしたとは堪忍ならぬなどと、半ば支離滅裂な言葉を叩きつけいきなり斬りかかった。「ひらりとのき」は若衆らしい動作である。相手を押しとどめて説明しようとしたが、当然ながらいつもの藤内とは違い、聞入れる様子もなく無闇矢鱈に斬りかかってくる。

ひた打にうつ太刀に半之丞右の肩先をあやまり此さはぎに家老家の子共はしり出かけ隔たり藤内を微塵に斬砕き半之丞深手に見へさせ給ふと各〻肩にかけ内に入。

寸分の隙なく一語の無駄もない描写で危機的場面を描く。半之丞が背負われて中へ入るより藤内が斬殺される方が記述が先になっているのも、瞬間的なあわただしい動きを自然に表現するが、半之丞が藤内の弟分になっていることを面白く思わない者が家来たちにも大勢いたこともはっきり分かる。「微塵に」「斬砕き」の二語が家来たちの気持を雄弁に語る。まことに簡潔きわまる文章だが、この簡潔さは次に書かれた恢復途上の半之丞の、秋の夜長の悶々たる思いのくどいとも言える叙述と対照的である。このあたり、伴蔵が帰って行ってから藤内の死まで――はやはり経過部とも言うべき箇所だった。

半之丞さまでの手とも思はざりし難ぎ九月十二三日の比より驗氣をえて倩〻藤内仕かたあまりに短氣にて仕損じ給ふ時。我此手を肩ずは家来の手にかけてやみ〳〵と殺させはせまじもの。悔てかひなき事ながら去年の明日の夜は竊におぬしの部屋にともなはれ。みづから東の窓を明南面の簾を巻てしめやかに話りなぐさみ弐人が中にかはす枕は傾く月の桂ならではしるものなく籬の菊の滴りを受ては不老ぶ死の仙薬を求ても契久しからん事を誓ひしに。思ひの外のうき別れ其詞もはや夢になりたるよな。此懐しき心の中をば露もしり給はずはかなく消給ふ時さそそれがしを恨みと思しけん。そふではない心底を。とてもかなはぬうき世に竹倉伴蔵がにくき仕業ゆへまざ〳〵かうしなし。死ば倶にといへる人を先に立たる始末これはいかなる因果めぐり来て今のかなしみ。思へば兄ぶん藤内殿の敵は伴蔵なるもの南無三寶をくれたり。のがさぬ〳〵といまだ疵の半も平愈せざるに欠出ては絶入狂ひ出てはふしまろび。

半之丞の述懐は、途中「去年の明日の夜は」と書かれ明確に日にちが決まっているが、不思議なことに、読んだ印象では幾夜も続いたものとの感覚も得る。「九月十二三日の比より」と冒頭にあるのも一因だが、それよりも述懐の内容、更に夢中で駆け出しては失神して倒れるという動作に至るまで、ここでは敵は伴蔵と初めて気づいた瞬間が書かれているのは確かだが、恐らく秋の夜の夜毎に長い時間に亘り、幾夜となくまた毎夜大差なく繰り返されたのだろうと感じさせる。

藤内を「あまりに短気」と言うがこれはまさに半之丞の実感だった。あれほど短気な藤内の姿を見たことは無かったろう。だがこの「短氣」一語で半之丞には藤内の心情が何ひとつ分かっていないことが示される。俺の説明をよく聴いたら納得して怒りを鎮

めただろうというのだから。藤内は短気どころではなく自暴自棄の状態だった。「仕損じ給ふ時」藤内によってこの俺が斬られればよかったという思いが裏にあることが感じられる。そう強くはないが、それは自分が斬られず藤内も無事であったら一番良かったからである。「我此手を屓ずは家来の手にかけて」これは強い後悔の思いである。だが「家来の手にかけてやみ〳〵と殺させはせまじもの」ははなはだ非現実的な仮定である。藤内がやみくもに振り回す刀から無事である半之丞なぞ想定不可能だ。とは言え、この悔恨の思いは藤内の死を描くくだりを知っている読者には痛切に迫る。たとえ半ば気を失い、声を出すことも立ち上ることも出来なかったにせよ、眼前で瞬時に経過した惨劇である。「俺がこの傷を負いさえしなければ」は繰り返し腹の底から絞り出された声であり比類ない実感を伴って表現されている。心がやゝ落着いた時には死んだ藤内の思い出がある甘さと共に甦る。「悔てかひなき事ながら」と「思ひの外のうき別れ」という、音が八五、七五と同じ形で情緒的意味もよく似た二句にはさまれた四行半は、「去年の明日の夜」と特定された一夜の思い出を語る。この四行半には悔恨悲哀怨恨等を直接に示す語はほとんどない。「月の桂」「籬の菊の滴り」等歌語やそれに類する言葉を配しながらも、回想として人物二人の動作を具体的に順次示していき、「東の窓を明南面の簾を巻て」などあまり深い意味のない些細な動作を書くことで、回想された世界の平和と静けさしめやかさを巧みに表現している。そして「竊におぬしの部屋にともなはれ」「しめやかに話り」「弐人が中にかはす枕」など内密で私的なうち解けた気分を表す句は、同時に露骨なほどはっきりと男色の記憶を語る。二人称代名詞「おぬし」は半之丞が亡き念友との男色の経験を思い出したとき、そこに或る楽しさを感じているらしいことを示す。その感覚と、「月の桂」はとも角「不老ぶ死の仙薬」などの語とがいささか相容れず調和を欠くように思われるのは現代的感覚のなすところか。しかし元禄以前の男色家の感覚などもっとわけの分からないものだったろうが、それにしては分かり易く書かれていることに驚く。この四行半は一時的に静かで落着いた気分が支配するが、もちろん直前の一句もあり悲哀の感は当然通奏低音のように続いている。回想に或る甘さがあったとしても「契久しからん事を誓ひしに」とひと度未来への誓いを思い出すと、相手の決定的不在がひしひしと感じられ、寒々とした現実へ意識が引き戻される。「其詞もはや夢になりたるよな」と。この「よな」の語尾は半之丞の肉声を聞くようなまなましさを持つ。「此懐しき心の中をば露もしり給はずはかなく消給ふ時さそそれがしを恨みと思しけん。」死んでいった愛する者が全くの誤解から死の瞬間自分を恨んでいただろうと信じられたとき、生者には救いがない。いつの世にも変らぬ真実である。この文、半之丞の藤内への無限のいとしさも現れている。「懐しき心」や「はかなく消給ふ時」のような凡句が、これ程の豊かな表現力を持つのは不思議なほどだが、直前に半之丞があのような回想にふけり、この上ない懐しさを持っていた事を我々も実感できたからである。「そふではない心底を」俺を恨むべき理由などまるでないのはすぐにでも分からせる事ができたのに相手は死んでしまった。誤解だ誤解だといくら心中に叫んだとことでもう何にもならない。絶望は完璧である。しかしくり返しこの思いは襲ってくる。この言葉はそうした不条理にのたうつ者のうめき声をそのまま声に聞くかのようである。その働きは先に見た「夢になりたるよな」の語尾に似るが、こゝでの方が半之丞のどうしようもない絶望に読む者がより深く感情移入している。うねり、くねり、上下する感情

の推移をそのまま伝える。テクスト全体の動きに読者の意識が乗せられているからである。「とてもかなはぬうき世」はよく考えてみるといささか意味曖昧だが特に気にはならない。町奴を念友にすることなど反対や妨害が多かったろうし、男色関係自体が「不老ぶ死の仙薬を求ても契久しからん事」を望むなどということとは矛盾した性格のものなのに、伴蔵のせいでそれも突如断ち切れてしまったというのだろうが、直前の「そふではない心底を。」があるためその意味が続いていて、俺の真情はそうではないといくら念じても相手には届かないという絶望を表しているとも解し得る。後者の意味もかすかにある陰影を与えていることは否定できない。「とてもかなはぬうき世に竹倉伴蔵がにくき仕業ゆへまざ〳〵かうしなし。」ここでやっと伴蔵の名が出てくる。藤内の死を悔み、悩み続けているとき伴蔵の如きは意識に上らなかった。「にくき仕業ゆへ」と伴蔵の行為を意識しているが、直ちに敵は伴蔵と結びつくわけではない。遅れは三行にも亘っている。「竹倉伴蔵がにくき仕業ゆへまざ〳〵かうしなし。死ば倶にといへる人を先に立たる始末これはいかなる因果めぐり来て今のかなしみ。思へば兄ぶん藤内殿の敵は伴蔵なるもの。「いかなる因果めぐり来て」と答を探し「思へば」と今一度立ち止まって考えた揚句、やっと伴蔵が敵だったと気がつく。気がついた途端「南無三寶をくれたり。のがさぬ〳〵」と「欠出ては絶入狂ひ出てはふしまろび。」という状態になる。半之丞がすぐに伴蔵を敵として思いつかなかったのは何故か。伴蔵などという存在は藤内の死の直接原因などと考えられなかったのだろう。半之丞の世界観からすれば藤内と伴蔵は次元が違うのだ。かけ込んできた藤内の気狂いじみた怒号の中には伴蔵の名もしきりに出てきただろうし、自分がその伴蔵と盃をしたことを許し難しと言っていたことは良く知っているが、今一つよく腑に落ちては理解できなかったのだ。当然である。藤内の怒りはもともと支離滅裂なのだから。半之丞は何を知り一体どう判断していたのか。伴蔵が藤内の屋敷に押しかけ自分が盃を与えてやったことを奇貨としてあたかも自分が伴蔵と心を通わせたかのように主張した。藤内はそれを真に受けおそらくは嫉妬にかられて沼菅邸へ怒鳴り込み、短気にも刀を振り回して家来たちに斬られてしまった。こういう判断では、まず藤内のあまりの短気さが全ての元として考えられるだろう。それにこれも先述したが、自分が不用意にも負傷してしまったこと、そのことの不運、そうしたことが大きく考えられ、伴蔵は目に入らない。述懐の終りのあたりで竹倉伴蔵の憎い行為によってこうなってしまったとはっきり理解しながら、それ故今の悲しみがあるわけだが、それは一体どういう「因果」が巡ってそうなったのかと考え、いろいろ思いを巡らし事の道筋をたどったあげく、やっと伴蔵がすべての原因と気付く。だが半之丞は伴蔵に完全に屈服したときの藤内の心中を知らない。男伊達が侍におどされて命乞いをするという事の意味も完全に分かっているわけではない。藤内の心中いや意識下深く隠されたいやしい町人根性など半之丞が知る筈もない。だから首尾よく敵を討ったとしてもそれはいわば偶然に正しい敵を選んだのだと言える。「はかなく消給ふ時さぞそれがしを恨みと思しけん。」という悲痛な真情のこもった句も、その推定は間違っていた。いや大いに恨んでいたかも知れないが、半之丞が考えていたように他の男と心を通わせたからという嫉妬めいた感情などでなく、下の階層が上の階層に対して抱く憎悪という、何とも散文的しかし深刻な身分意識だった。半之丞の思い違いはこの十六行ほどのくだりに如何ともし難い虚しさをもたらすが、それは全体に漂うまことに沈痛な感覚と調和し、互いを強

めている。ここでは主人公の心理を一見自然な動きのまゝに表現していきながら、語順や言葉の数さえ計算し、読む者の意識を悶々の思いに苦しむ若者の心の動きに同化させている。これだけの短さでそれが実現されているのに驚くが、特定の一夜の出来事でありながら、同じような夜が幾夜もくり返されたかに感じさせるのは、文章の短かさも大きく役立っている。

以下は簡略に記す。力の入った表現はもう見られない。寝ていた半之丞がいきなり駆け出して父や家来に静止されたとき、「此下心をしれる程の者は殊更哀に袖を絞りける」とある。「興覚」した人達と対照された少数者、これは単に衆道の理解者と言うより「心達の結構なる御侍は是が簾下に御機嫌取程の器量」とされた侍たちと通ずるのではないか。もちろん少数派で元禄以後は激減するのだろうが。西鶴がここで彼らについてひと言書いたのは半之丞と伴蔵の社会的性格の差をよりはっきりさせるためであろう。

「藤内弟藤八なる人物が出てきて「兄やみ〳〵と討れたるを無念に思ひ。詰。所詮敵は半之丞年来の心底飜したる侍畜生」と半之丞を兄の敵とつけねらう。ここにも一人思い違いをしている男がいるわけだ。半之丞が伴蔵を敵と判断したのは結果的に正しかったから、その思い違いに気付かない、あるいは無視する読者は多いだろう。そうした読者に、考えてみれば半之丞だって藤八と同じこと、と思わせる機能を持つ。

半之丞が伴蔵を討った場面は書かれなかった。当然だろう。本話はすでに藤内邸玄関前での伴蔵の怒声と、秋の夜の半之丞の思いという性格の対照的に異なった二つの場面を書いている。共に西鶴が筆に精根込めたときの空恐ろしいほどの文章だった。それに加えて主人公二人の決闘場面など考えられない。前の二場面を無力化し、作品を崩壊させただろう。それに伴蔵がどのように半之丞に討たれたかは、書かれたことだけで大凡は想像できる。半之丞が藤八を訪ねたのは「十月十九日の夜半」とされている。負傷は八月廿八日であの述懐は九月十二三日頃だった。とてもまだもと通りに恢復していまい。「武道みがき」の伴蔵が手もなく討たれたというだけで、伴蔵の心のありかたを教えられる。伴蔵は藤内の最後についてその心理的背景はともかく、何か聞いていたであろうから、半之丞が敵討に来ることを予想していたかも知れない。自然児である伴蔵が傷み衰えた半之丞にまともに太刀打ちできようか。男色家が自分の惚れている若衆に刀を向けることがあるのか、これはよく分からない。が、いずれにせよ伴蔵は抵抗の姿勢を保ちながら内心従容として死んでいったのだろう。不思議なことは何もない。当然至極の成り行きである。伴蔵の死を描いたなら読者の同情を引いたかも知れない。それは避けるべきだった。

伴蔵の首をよく洗った上、下着の片袖を引きちぎってその首をつつみ、それを藤八の前に投げ出しそのまま前に倒れ鎧通しで心臓をさして自害という半之丞の姿には、最初の頃に強調された美貌の若衆としての他人の目を意識した美事な行動が完全に戻っている。それに接した藤八は「あきれ果何事も前世の業なるべきを是程いさぎよき心底しらずして今迄半之丞を恨みたるよしなや・・・」と書かれる。半之丞が属する世の少数派、かぶき者の流れを引く自由な精神の持ち主の美学が藤八に感銘を与えた。それこそがいつまでも続く敵討の堂々めぐりを停止させたと言える。それは本篇の唯一の救いである。本話の語り手は終始半之丞的美学と倫理に同情と共感を惜しまない。

本篇でも歌枕久米の皿山を最初の舞台に選んでいること以外

に、劇的な場面で歌語が用いられることの意味は何か。「塩釜の浦見は半之丞」「傾く月の桂・・・籬の菊の滴り・・・不老ぶ死の仙薬」これらは表現に制約を与えたり、表現すべきものをゆがめたりすることはなく、むしろそれぞれの場面で表現上適切な用法とさえ云えることは、他の諸篇でも同様である。ここでは立ち入って考えることをしないが、殺伐きわまる話にある余裕を与えていることは確かである。

この一話は誤解、意地、意識下の偏見など、人物の心理の複雑微妙な綾がなまなましく表現された一篇となっている。これほど簡潔きわまる文章で、不思議なほど豊かな内容を盛った作品は西鶴にも少ない。しかしそれがいかに苛烈といえども、結局ただのありふれた喧嘩話に過ぎないことは、読む者になんともうつろで虚しい感を与える。末尾の簡略でしらじらしい終り方はいかにも本話にふさわしい。

注

注　「（敵討の原因で）悪口に次いで多いのは嫉妬である。これも同じく十例ある。（中略）沼菅半之丞、町人の能登屋藤内と男色の関係があったが、竹倉伴蔵との仲を疑った藤内が押しかけて来たのでこれを斬る。藤内の弟藤八が仇討に来たが伴蔵の首を差し出して自害する。」野田壽雄『日本近世小説史　井原西鶴篇』（393ページ）

「伴蔵との仲を疑った藤内」と云うのは言葉が足りない。正確には仲を疑ってなどいない。嫉妬しているかのように行動しているだけだ。本気で自分を欺いて、今おのれは嫉妬に狂っていると思っているにしても、実態は盲目的な怒りである。次のような文もある。

「藤内は直に屋敷にかけ込んで、半之丞に逢って詳しく話しもしないうちに脇差を抜いて斬りつけた。藤内は思慮なく感情的にいかり狂うのは、自分が愛している半之丞が相手に盃を与え、嫉妬の感情に悩まされるがそれに対してどうすることもできないからである。強い愛はあるが、町人である限りどうすることもできない。愛が強い故に悩み乱れ遂に相手を殺そうとする。藤内にとって半之丞への愛が人生のすべてであった。従って半之丞をとられることは己の人生の破滅であった。それは愛における許しによって回避できるものではなかった。」白倉一由『西鶴文芸の研究』（400ページ）

筆者には藤内の半之丞への「強い愛」など、作品のどこからも読み取ることができない。だがこの解が今日支配的なのかも知れない。冨士昭雄氏の新編日本古典文学全集64（二〇〇〇年八月刊）でも、「町人にはしほらしきと思ふ折から御姿を見初一命を御返事なき先に参らせたるよりかはゆがらせられ・・・」を「藤内の方から半之丞のお姿を見初め・・・」と現代語訳しているからである。（同氏による明治書院版対訳西鶴全集も同じ）。誤りとせざるを得ない。兄分の方が手紙をよこしたり、積極的求愛を行うのは普通だが、ここでは町人の藤内が歴とした侍の子息半之丞に対してそういう行為に出るとは考えられない。しかし、いずれとも取れるように書いたのは西鶴の意図なのだ。侍の息子が町奴に恋い焦がれるなど、公に問題になった時の用意に、ことさら曖昧に書いたのだ。

（未　完）

平成十三年十一月稿